

まとめ

本年度青少年心身育成委員会は、子どもたちに言葉や文化が異なる相手とペアとなり、目標に向けプログラムに取り組んでいただきました。はじめは緊張した面持ちでしたが、レクリエーションやロボット製作、そして宿泊体験を通じ、自身の力で言葉や文化が異なる相手を受け入れてくれました。

子どもたちにとって、この経験から得られた自信は、経験のないことにも自ら進んで挑戦する最初の一步に繋がります。私は、それらの挑戦を繰り返し自分の世界を広げることで、グローバル化の進展による自身を取り巻く環境の変化にも対応し、ぎふのまちや日本に限らず、たとえ世界が舞台でも理想に向け挑戦できる逞しい力をもった人に成長すると信じています。そのために、ぎふのまちに青少年を対象とした国際交流は必ず必要であることを確信しました。

今回、ワールドチャレンジが創り上げた環境を用意するための課題と、その環境で子どもたちが得た成果を報告書にまとめました。今回の様な経験を積むことは、子どもたちがもつ可能性を更に広げることになります。本報告書から青少年期における国際交流事業の意義を感じていただき、新たな運動へ繋がるきっかけになることを願っています。

公益社団法人 岐阜青年会議所 青少年心身育成委員会 委員長 安藤 康宏



参加国



Brazil
ブラジル
19人



China
中国
1人



Egypt
エジプト
4人



Indonesia
インドネシア
2人



Japan
日本
30人



Philippines
フィリピン
4人

日本人男子19人/女子11人 外国人男子19人/女子11人

※アルファベット順

発行 公益社団法人 岐阜青年会議所
2014年度青少年心身育成委員会

編集責任者	副理事長	柳原 弘幸	委員	岩井 康志	委員	鷺見 友宏
	室長	兼山 英治				
	委員長	安藤 康宏				
	副委員長	臼井 俊治				
	副委員長	後藤 大				
	副委員長	文野由佳子				
			委員	大野宗一郎	委員	堤 洋介
			委員	河合 一男	委員	中村 浩二
			委員	桑原永多郎	委員	橋本賢一郎
			委員	後藤 哲裕	委員	武藤 一将
			委員	酒井 本文	委員	山田 章嗣



公益社団法人 岐阜青年会議所
2014年度 青少年心身育成委員会

国際交流事業

ワールドチャレンジ

報告書



Desafio

挑战



挑戦



Challenge



はじめに

近年、世界規模でグローバル化の流れが進み、言葉や文化が異なる人同士の交流が活発に行われています。日本国内でも外国の人を見かける機会が増え、同じ学校に外国の子どもが通うといった青少年を取り巻く環境も変化しています。しかしながら、日本は様々な分野において、「保守的」、「排他的」、「内向き志向」と表現は色々ですが、諸外国と積極的な関わりをもたず人的交流もそれほど活発に行われておりません。

本年度青少年心身育成委員会は、グローバル化が進み私たちを取り巻く環境が変化していくなか、ぎふのまちの子どもたちに理想実現に向け逞しく生きる力をもつことで、明るい未来を自身の力で切り拓いて欲しいと願いました。そのために、価値観が固定化していない青少年期に言葉や文化の異なる子どもと目標に向け協力し、言葉や文化の壁を乗り越えた経験をすることで、明るい未来を自身の力で切り拓くための糧としていただきたいと思います。

ここでは事業を構築するまでの課題と事業の概要、そして参加した子どもたちの声や事業後の変化をご報告させていただきます。

事業の目的

国際交流事業「ワールドチャレンジ」では、子どもたちが言葉の通じない相手と言葉や文化の壁を乗り越え、共に目標に向け挑戦することで得られる達成感から自信に繋げてもらうことを目的としています。

事業構築に至るプロセス

調査

子どもたちを主体とした国際交流事業を行うため、岐阜市および近隣市町村の国際交流団体へ日本に在住する外国人家族についてヒアリングを行いました。

- 外国人の家庭に対して直接、情報を伝達する手段が少ない。
- 交流イベントも、講義形式、展示形式といった一方向で情報を伝える形式が多い。
- 外国人の家庭は、日本人との交流を求めているが、交流させる場所や機会が少ないため同じ国の家庭同士での交流に留まっている。
- 言葉の違いから、交流に抵抗感をもっている。

日本に在住する外国人家庭において、日本人との交流に対し、私たち日本人が抱くのと同様の不安を感じている状況が把握できました。しかし、だからこそ日本人や日本の社会を知りたいと希望する声も多くあり、そのなかでも、子どもたちが一緒にとり組む国際交流事業が外国人家庭のニーズとして確認できました。

これらの結果を受け、普段日本人との交流が少ないことからくる参加に対する不安を払拭し、外国人の子どもたちにも参加意欲をもていただくためにどうすればよいか、初期指導教室や外国人学校等を重点に、ヒアリングを行いました。

課題

ヒアリングを通じて目的を達成するためには、以下の点に留意する必要があることがわかりました。

- 同じ国同士で集まってしまい、新しい交流に繋がらないおそれがある。
- 言葉が通じなくても不安を取り除き、楽しめる設えが必要である。
- どの国の子どもでも夢中になって打ち込めるツールが必要である。
- お互いを知るためには長い時間を共有する必要がある。

上記の結果を考慮し、青少年心身育成委員会は目的達成のために必要な要素として、以下の内容をプログラムに組み込みました。

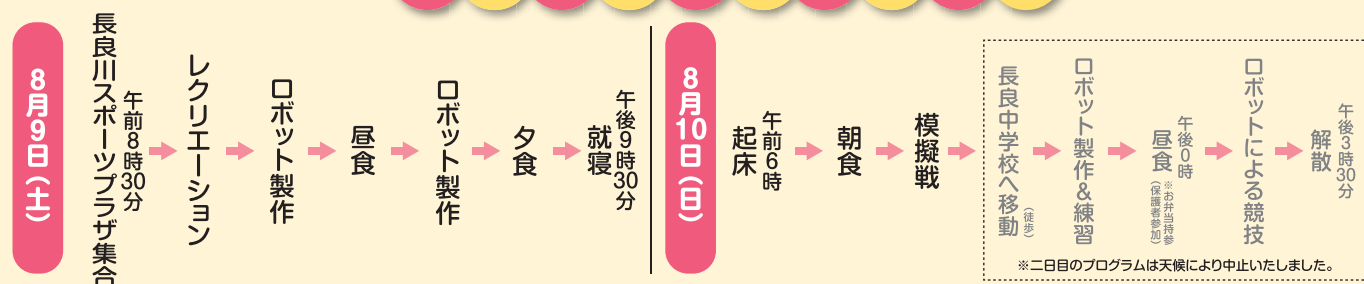
- 異なる国の子ども同士でペアを作る。
- ペアで共通の目標を作り挑戦する。
- 運動能力などの個人差が少なく、興味の湧くツールを使用する。
- 文化・生活習慣の違いを受け入れるために寝食を共にする。

これらを組み合わせた結果

ロボットを作り、競技に向け協力しながら創意工夫を凝らすことに挑戦し、一泊を通じ交流するなかで互いを理解し認め合う！

という事業を構築しました。これをもとに参加者を募った結果、日本人の子どもは募集開始早々定員に達し、外国人の子どもについては、言葉が通じないけど参加してみたいと申し出がありました。

実際のプログラム構成



岐阜市、岐阜市近郊の小学校5・6年生の日本人の子ども30人及び、言葉や文化の違う同年代の外国人の子ども30人を対象に「ワールドチャレンジ」を実施しました。その結果を参加した子どもや保護者よりいただいた感想を交えてご報告します。

ワールドチャレンジを終えて

レクリエーション

- 何を言ってるのかわからないけど、お互いに楽しめた。

はじめは緊張をした面持ちでしたが、徐々に笑顔があふれ距離が縮まりました。

夜のレクリエーション
(マイムマイム)



ロボット製作

- ペアの子と一緒にロボットを作れた時間は宝物。
 - どうしたら勝てるか一緒に考えながら決められた。
 - 身振り手振りでなんとか通じたのでよかった。
 - ペアの子がロボット作りのアイデアを出してくれてすごいと思った。
 - 外国の子と言葉が分からなくて最初は不安だったけど、向こうも同じだと思ったらなんとか頑張れた。
- ペア同士で模擬戦に誘ったり、相手のロボット製作を手伝う場面が見られるなど、目標に向け一緒に創意工夫を凝らすなか、言葉が通じなくてもお互いわかり合おうとする姿が見られました。



ロボット製作



模擬戦

結果

ロボット製作では、ペアの子どもを手伝うといったお互いを気遣う場面や、チームで競技に向け改造のアイデアを出し合うなど、言葉が通じなくても楽しみながら一緒に製作に取り組み言葉の壁を越えていました。宿泊体験では、外国の食習慣や言葉に興味をもつ子どもや、外国人の子どもにトランプゲームを教えている子どもがいるなど、お互いに相手を受け入れている様子が窺えました。天候により二日目の朝に事業を中止しましたが、帰路に着く間際まで相手の子どもを模擬戦に誘い、力を合わせて競技している場面が見られるなど最後まで交流を楽しむ姿がありました。しかし、外国人の子どもの中には、不安から当日欠席をしたり、言葉の通じる同じ国の子ども同士で集まっている場面もあったため、より交流を促す働きかけが必要であったと感じています。

助け合う
子どもたち



※子どもたちのコメントより

保護者から見た事業後の子どもたちの変化

- 言葉が通じなくても、また外国の人がいるイベントへ参加したいと言っている。
- 子どもが将来国際的な仕事をしてみたいと考えるようになった。
- 日本の子と交流したことがなかったから不安な顔をしていたけど、今回の体験が自信になったみたい。
- ペアの子どもからもらった外国語で書かれたメッセージカードを自分で読もうと翻訳していた。

※保護者のコメントより

事業を通じ、経験のないことでも前向きに挑戦しようとする意識が芽生えました。

国際交流の意義と継続することの重要性について

- 小さいうちから外国の子どもと交流できたのは貴重な経験。
- 子どもの交流を通じて、親同士の交流の必要性を感じた。
- 国際交流は人やまちなど、様々な分野への可能性を模索でき、もの凄くポテンシャルの高いことだと感じた。
- 国際交流は人を介した交流が一番のカギであり、こういった事業を継続することが多文化共生に向け非常に重要だと思った。

※協力者のコメントより

ぎふのまちで子どもたちを対象とした国際交流事業の意義を感じていただきました。